

手編み防寒具届ける

高岡教区 被災体験者から委託

「能登半島地震の被災者の皆さんに、寒い冬を暖かく過ごしてほしい」。東日本大震災、阪神・淡路大震災で被災した福島、兵庫両県の住民2人から、「被災地に届けてほしい」と高岡

教区の災害救援活動専門委員会に手編みの防寒具が送られてきた(写真)。思いを託された同委員会は昨年、支援を続ける石川県輪島市門前町の仮設住宅などに届けた。



同委員会に防寒具を送ったのは、2011年の東日本大震災で被災し、20年に90歳で亡くなった福島県飯舘村の佐藤ハツヨさんの遺族。避難生活の中でハツヨさんが作り続けていた毛糸の座布団や膝掛け、コースターなど約90点を、「能登の被災地の皆さんに役立ててほしい」と寄せた。また、遺族と親交のある1995年の阪神・淡路大震災で被

災した兵庫県加古川市の松下よし子さんも「私も当時は多くの方から支援を受けた。何か恩返しをしたい」と手編みのネックウオーマー30枚を届けた。

同委員会は、東日本大震災の発災からおよそ10年間にわたり、福島の仮設住宅を訪ねて炊き出しや餅つきを行い、富山米を届けてきた。また、原発事故の影響を受けた同県飯舘村の子どもたちを富山に招く保養活動にも取り組んできた。そうした被災地支援の中で結ばれた絆が今回の縁となった。

同委員会の織田隆夫委員長(富山県高岡市・長光寺住職)は「防寒具をお届けし、遠くからも思っている人がおられることを、被災地の皆さんにお伝えさせてもらった」と話した。